



北炭幌内立坑保存の取り組み

三笠市にある北炭幌内炭鉱の入気立坑（通称＝青山立坑）を所有する建設会社（本社＝岩見沢市）は、同立坑の解体作業に着手したことが、8月19日の北海道新聞報道によって明らかになりました。

これに対して、地元の三笠市で活動を展開するみかさ・炭鉱の記憶再生塾（事務局長＝当NPO伊佐治理事）は、北海道炭鉱遺産ファンクラブ（炭鉱ナビ）の高橋事務局長と連携して、急遽、解体回避に向けた取り組みを展開しました。

炭鉱ナビの高橋事務局長の仲介によって、元炭労組合員らで組織する炭労対策会議三笠支部も活動を展開しはじめ、保存に向けた署名集めが開始されました。

このような動きに対して、立坑を所有する建設会社は、8月22日に解体作業の凍結を決定しました。来年春までに買い取り（関係者の情報によると所有者の主張価格は1,500万円）が具体化しない場合は、再び解体する構えではいますが、まずは当面の解体の危機は免れました。

8月26日には、関係7団体（当NPO、炭鉱ナビ、北海道遺産推進協、北海道産業考古学会、空知地元の3市民団体）が道の佐藤副知事を訪問し、保存を求める要望書を提出。また、9月9日には、開会中の道議会に対しても要請活動を展開し、道議の現地視察を求める予定です。



これを受けて三笠では、9月4日、みかさ・炭鉱の記憶再生塾と炭労対策会議三笠支部が連名で、小林・三笠市長に対して約800名の署名を提出し、市の保全に向けた動きを要請しました。

三笠市では、みかさ炭鉱の記憶再生塾が、炭鉱遺産を歩いて巡る「幌内歩こう会」を連続して開催したり、北炭幌内炭選炭機跡に幌内炭鉱景観公園を市民の手で造成するなど活発な活動を継続して展開してきましたが、市民を巻き込む大きな動きに発展し切れてこなかったことが課題でした。しかし、今回の立坑解体問題によって、一気に市民への関心が拡がりました。これまで三笠市は、炭鉱遺産を手がかりにした政策展開は消極的な姿勢を示しており、その理由として炭鉱遺産に対する市民理解が得られないことを挙げてきましたが、今回、短期間で多くの署名（総有権者数の8%）が集まったことによって、これまでの市の姿勢を変化させるよう促して行きたいと考えています。

○北炭幌内入気立坑

1967年完成、深さ1,000mで国内最深、このほか三笠市には住友奔別炭立坑（現存する立坑では国内最大）・北炭幾春別炭（夕張道内最古）が残り日本随一の立坑シティと言えます

助成金・補助金

当NPOが秋山生命科学振興財団に提出した、炭鉱遺産ガイドシステム構築の実証調査のプロポーザルが採択され、社会貢献助成金500千円を頂きました。

これは、普及が進むApple社のiPodなどMPEG-4動画形式に対応した炭鉱遺産ガイドを作成し、現地での再生機の貸出や、インターネットでの提供を行おうというものです。現地ガイドは短期間では育成が難しいことから、経験者の語りを通じた現地

案内の機会は限られていますが、この難点を補って、多くの方に炭鉱遺産を巡って頂くためのツールとして活用が期待されます。さらに、コンテンツではガイド役として元炭鉱マンに登場してもらい、坑内労働で蓄積した知見が社会に役立つことにより、生き甲斐を感じてもらうことも意図しています。また、石炭博物館など施設での外国語案内への展開なども想定しています。

現在、テストバージョンを制作しており、そこで改善点を把握してから、年度内に2～3作品程度の公開を予定しています。

この他、空知支庁から北海道地域政策総合補助金700千円の交付内定を頂きました。昨年度500千円に続き2年連続の交付となります。炭鉱遺産の保全活用、学術活動の支援、普及啓蒙ための出版、市民団体相互の交流など、空知支庁の独自事業と連携して、幅広い事業に活用します。

石炭博物館ガイドブックを発刊

当NPOでは、出版物の第一弾として『石炭博物館ガイドブック』を発刊しました。1998年に制作された旧ガイドブックの内容を大幅に充実したもので、炭鉱を理解するための入門書としても最適です。掲載した展示写真は、炭鉱遺産の写真で有名な若手写真家KEN五島氏の全面協力を得ました。

1部525円ですが、NPO会員には送料NPO負担ジャスト500円でご提供しますので、追加ご希望の方は事務局まで。



今後の行事情報

● 9月29日(月)17:30～18:30 北海道中央労災病院(岩見沢市)で第3回じん肺患者さんの話を聞く会が開催されます。

● 10月18日(土)14:00～17:00 鉄道の日を記念して、JRレールセンター(岩見沢駅裏)でイベントが開催されます。吉岡理事長も登場しますが、今回は産業遺産がメインではなく鉄道ファン向けに特化した内容となっています。でも…普段見ることができない内部に入るチャンスではあります。

● 10月21日(火)～11月24日(月) 三笠市立博物館で軍艦島写真展が開催されます。

● 10月24日(金)18:30～20:30 札幌学院大コミュニティーカレッジで公開講座「ヨーロッパに学ぶまちづくり」(全3回)の一つとして、吉岡理事長がドイツ・ルール地域のIBAエムシャーパーク構想について解説します。

○その他、行事情報は随時ホームページに掲載してご案内しています。

<http://www.soratan.com/>

復刻・岩波写真文庫『石炭』

1950年に刊行が開始された岩波写真文庫は、当時の日本の姿を切り取った貴重な資料です。今回、幾つかの号が厳選され、復刻シリーズとして販売されています。



刊行当時に燃料の王様として君臨し、勢いがあった産炭地を活写した『石炭』は、赤瀬川原平セレクションの一つとして復刻の対象となりました。写真は九州産炭地のものが主体となっていますが、石炭の生産から流通まで、そして炭鉱で働き暮らす人々が、今日に生き生きとよみがえってきます。

このほか、『汽車』『蛔虫』『南氷洋の捕鯨』など、魅力的な号が復刊されています。

○『岩波写真文庫 石炭』岩波書店、¥735

清水沢タウンウォッチングを開催



7月6日(日)、炎天下の中、夕張市清水沢でタウンウォッチングを開催しました。

空知支庁では、旧空知産炭地域活性化を目指して、2007～2008年度の2カ年で、炭鉱遺産を活用した地域活性化戦略を策定しています。策定作業の一環として、2008年度に空知各地で地域内外の市民を交えたワークショップを行い、その成果を戦略に反映することとしています。

まず第一弾として、当NPOと空知支庁の共催で、夕張市清水沢地区でタウンウォッチング(まち歩き)が開催されました。夕張市内外から参加した31名が、北炭清水沢炭鉱・北炭夕張新炭鉱の炭住街や中心市街地として、戦後に急成長した清水沢地区にある資源を歩いて探し、今後の展開の手がかりを考えました。

まち歩き後の振り返りワークショップは、宮前浴場の脱衣所を会場に行われ、終了後には皆で炭鉱時代から続く共同浴場に入浴して帰りました。

▼ドイツ・ルール地域の炭鉱遺産

ズリ山の上に置かれた巨大なモニュメントは、何も特徴のなかった炭鉱街ボットロップ市を一躍有名にしました。

「テトラエーダー」と名付けられた三角錐のモニュメントは高さ60m。写真の地表部にいる人間と比較すると巨大さが良くわかります。高さ45mの展望台まで登ることができ、そこから見る緑あふれる工業都市の景観は素晴らしく、透けて見える金網の通路敷き板はスリル満点です。

